●春日部市民文化講座（第 22 回）　「よみがえる高山右近の茶の湯」

◆日時：2017 年 2 月 22 日(水)　11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■茶の湯外交

きょうのテーマは、「蘇る高山右近の信仰と茶の湯」ということで、これは私の 40 年来の研究テーマです。皆さんはお茶のお師匠さんから、**「茶室では政治の話、宗教の話、自分の自慢話の 3 つの話はダメよ」**と教えられたと思うのですね。ところが、利休さんの頃はそんなことはなかったのですよ。その教えというのは、後になって「利休さんが教えたよ」と言って綴られた『南方録』、江戸時代になって作られたものによるものなのです。この『南方録』について、今ではあらゆる学者が「あれば偽書である」と言っているのですね。ぼくが 50 年前くらいにお茶を習った表千家のお家元の側近だった先生は、ぼくに『南方録』を教えたのです。でも、10 年くらいしたら、『南方録』には利休さんが言ってないことまで書かれているよねという論文が出されて、今はほとんど信用されていません。ですから、未だに「南方録には‥」と仰っている方は、相当昔にお茶を学ばれて、遅れた知識をお持ちの方です。江戸時代に、今のぼくたちが知っている「茶の湯」というものが確立されたのですね。しかし、**利休さんの時代に戦国の武将たちは、あの茶室の中でいろいろなことをやっている訳ですよ。「いつか誰々を殺めてしまおう」とか、鉄砲玉の話もしたと思います**よ。実際のところ利休さんは信長に鉄砲玉を送っているのですよ。その証拠の文書、信長からの感謝状が不審菴にあり、それは公開されています。ですから、今日の安倍首相とトランプ氏による「ゴルフ外交」のように**「茶の湯外交」**が行われていたのですね。

■日本人がキリスト教を嫌う訳

きょう、ぼくは**「何で日本人がおしなべてキリスト教を嫌いなのか」**ということをテーマとしてお話ししたいと思います。それはぼくが 16 歳で洗礼を受けた時に、直ぐに肌身で感じたことは「オレはみんなに嫌われることをしているんだな」ということでした。ぼくがバカにされて否定される時の凄い言葉は、ぼくに対してその人が「俺は日本人だ」という言葉でした。ぼくも日本人なのに、ぼくに対して「俺は日本人だ」と言うのですよ。それから、ぼくがどなたかに書いた物を渡そうとすると、「間に合っています」と言われて断られるのです。つまり、キリスト教嫌いなのですよ。

1. 秀吉、家康から始まったキリスト教弾圧政策

秀吉が筑前筥崎（はこざき、現在の福岡市）で**「伴天連追放令」**と**「禁教令」**を天正 15 年（1587 年）6 月 19 日に突然出したことです。これは出しただけで直接被害を受けたのは**高山右近**だけで、彼はその時に明石城を返して大名を辞めたのですね。その後に天下をとった家康も幕府を保つために、同じ政策をとった訳です。そして、高山右近は家康の命令で日本から国外退去させられたのです。彼は宣教師と同じ扱いを受けて、フィリピンに流されて死んでいるのですね。それが、秀吉、家康から始まって江戸時代約 300 年、明治になるまで続いてきたことです。

2．明治以降の天皇を神とした政策

では、明治政府は何をしたかと言うと、実は 70 年前まで、**日本で天皇は神だった訳です**。亡くなった昭和天皇は GHQ によって「人間宣言」をさせられている訳ですよ。そういう歴史を持っています。その時の教育として、天皇の言葉が教えられた、それが「教育勅語」なのです。小学校には、奉安殿（ほうあんでん）と言って、天皇と皇后の写真と教育勅語を納められた建物があって、必ずそこには一礼して通らなければならないという建物がありました。明治時代になって天皇を神とした宗教を国民に押しつけ、戦争に走って日本は潰れた訳です。

■高山右近の茶の湯との出会い

次にお話ししたいのは、高山右近がいつ茶の湯に出会ったかということです。織田信長が世に出始めた頃、頭角を現し始めた頃ですが、**荒木村重**という人がいました。この人は、足利義昭の権力下にあって、当時の皇室・公家を守る武力集団にいて畿内に居たのです。そして信長から機内の軍事と交通の要衝であった攝津を任されたのです。**飛騨守の高山右近は、その荒木村重の家臣で、高槻城を治めていました**。この荒木村重は文化人としても相当な人でした。その村重が織田信長を裏切った時に、高山右近は村重の配下にあったので、高山家は潰れる危機にあったのです。その時に、右近は頭を剃って、死装束で信長の前に一人で行っているのですよ。その時に、信長という人もなかなかの人で、右近の志を良しとして処罰しなかったのですよ。お構いなし。その時に、村重は一人、毛利家を頼って山口県に逃げて行ったのです。寺に住んだ村重は、人間の道を踏み外した自分を省みて、“道糞（どうふん）”と名乗って茶人としての道に生きるのですが、信長が死んで秀吉の時代になると、秀吉は村重の才能を思い出して呼び戻して御伽衆に加えるのです。その時に“道糞”が“道薫（どうくん）”になったのです。御伽衆というのはブレーンですよね、そこに加えられたのです。そんな**村重に見込まれて、高山右近は千利休に引き合わされて茶の湯を学び始めたのです**。ですから、最初に茶の湯の指導をしてくれたのは、荒木村重だと思うのですが、これも証拠がないんです。

■右近の信仰

高山右近は 10 歳で洗礼を受け、父親から受け継いだキリスト教の信仰を生涯守り抜くのです。荒木村重の謀反、筥崎での追放があっても信仰が揺らぐことがありませんでした。筥崎から小豆島に逃れる時に彼は、神様が何とかしてくれるから、もし何ともならなかったら天国に行ければいいんだからという、本当に気楽な信仰生活に入ったと考えます。もちろん嫌なことはいっぱいあるのですよ。そんな中でも思い患うことなく生きる、そういう生き方を学ぶのです。ですから、前田利家の金沢に呼ばれて暮らすときには、凄い石高で客将となり、家来も沢山持つようになり、内藤ジョアンという人も来たりして、金沢では教会を少なくとも 3 つ造るのですよ。一説には女史修道院まで造ったという説もあるのですよ。そして茶の湯三昧です。やっと全てから解放されて、茶の湯を心から楽しむのです。だから、金沢百万石の文化を支えた一人に、ぼくは高山右近を数えていいと思います。畿内にいる時から居るときから**右近は「南坊」という号を用いていました。**その「南の坊」というのは彼の理想の姿で、いわゆる南蛮坊主、当時の宣教師の捩りです。高山右近が削った茶杓として今でも一本だけ残っているものが、滴翠美術館(芦屋市)に「花十」と銘が書かれた茶杓があります。「はなくるす」と読まれたのが、西山松之助先生です。この茶杓には、「御坊へ」と書かれているのですね。この「御坊」というのは宣教師のことだと思います。当時、宣教師で日本の宣教に燃えている方々は、日本の茶の湯に非常に熱心でした。アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノという宣教師は、「日本で宣教する人たちは茶の湯を習え」と言っているのです。茶の湯の座敷を造り、最低こういう物を買い求めて、周りの人たちをおもてなししなさい。自分が得意でないと思ったら人を雇って教会で茶の湯のおもてなしをしなさい。お料理も含めてね。高山右近は国外追放にされ、利休さんからもらった羽箒だけを持って宣教師たちと一緒にマニラに行き、40 日で亡くなりました。そこに**彼のイエスキリストへの信仰の中で捨ててこそ、脱ぎ捨て削ぎ落としてこそ、人間は最後の最後まで生きるんだということを感じました。**ぼくたちは最後の最後は削ぎ落とすのですよ。棺桶には何にも持っていけないよ。

高山右近作「花十」茶杓、滴翠美術館

■高山右近の茶の湯とは何か

ぼくは、高山右近の茶の湯とは何かということをずうっと考え続けてきました。一つは、聖書のこの言葉だと思うのです。**「あなたがたの天の父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深くしなさい」**【ルカ6:36】 つまり、創造者である天の神様は憐れみ深い方です。だから、あなた方が神様を信じているならば、憐れみ深く生きなさいよ、というのです。で、憐れみ深く生きるということは一緒にいるということです。一緒に生きるということです。ぼくはずうっとキリスト教徒として千利休の「侘び茶」は何かと考えた時に、このイエス様の言葉「憐れみ」です。**「憐れみ」**という言葉を英語でいうと**「compassion(コンパッション)」**になります。コンパッションというのは「コン＝共に」「パッション＝苦しむ」ということです。ですから、高山右近が利休から学んだ「侘び茶」というのは、私が信じている父なる神様の「憐れみ」。だから、嫌な奴もお客として迎えて一緒飲み食いできるのです。

■自分にしてもらいたいことは‥

一緒にいるというのが侘びなのです。共にいるということが侘びなのです。そして、捨ててこそ、自分の欲とか好き嫌いとかを捨ててこそ、そういったことが分かってくるのです。次の聖書の言葉を読みたいと思います。「それで何事でも、自分にしてもらいたいことは、他の人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」【マタイの福音書 7 章 12 節】 です。何事でも自分がしてもらいたいことは、他の人にもしてあげなさいというのは、侘び茶の一服というのは、自分が飲みたいなぁ、他の人に呑ませたくないなぁと思えるほど上手に美味しく点てたお茶を、他の人にどうぞと差し上げることなのです。つまり**自分自身が好きで、自分自身をもてなす心がなかったら、他の人におもてなしは届きませんよ。**

■侘び茶とは自分を愛し、隣人をもてなすこと

ぼくが最初に言った「何で日本人はキリスト教嫌いになっちゃったのか」、文化的な関係から、秀吉、家康、明治政府と私たちが教育されてきたことの中に、理由もなく「家は間に合っています」「俺は日本人だ」という教育をされてきた。では、今の教育は何かといったら自由です。そして、何が良くて何が悪いかが分からない、嘘と本当が分からなくなっちゃっているのです。だから、皆さん、**ますます「侘び茶」に修道して、「侘び茶」とは自分を愛することです。嫌な奴である自分自身を愛することで傍にいる人をおもてなしできるのです。**お濃い茶が無理ならば、お薄を点てて「どうぞ」とおもてなしすることです。そのためには、けちらないで美味しいお菓子を用意しておくというのが「お・も・て・な・し」です。

「侘び茶とは自分を愛し、隣人をもてなすこと」‥私もその通りだと思います。